

## 在外研究員報告

**前文明期の社会組織と構造の研究** オーストラリア大陸にはその起源が数万年前に遡る住民（アボリジニー）が居住し、狩猟採集の生活をしていて。彼らは土器を知らず、利器は石器と木製品が主体であって、利器による時代区分で言えば、石器時代の段階にとどまる。18世紀以降の西洋文明の流入は、彼らを一挙に近代の鉄器時代に移行させた。石器から鉄器時代への変化を日本に求めると、弥生時代の初期に対比できよう。稲作社会への移行は巨大な変革を日本にもたらせ、その後の日本文化の基礎となった。この地で起きた事象を研究することは、弥生時代初期を追体験する事に等しく、また転換期の諸問題を考える上にも参考となる。今回は、変革期におけるアボリジニーの物質文化に焦点を絞って調べた。（金子裕之）

**発掘調査先人の足跡を辿る** 文部省在外研究員として、2ヶ月間、イギリス・ネーデルランド・ドイツ・スウェーデンの順に4カ国を駆け巡った。研究目的は「発掘調査法の研究」、主たる受け入れ機関はケンブリッジ大学。ピット・リヴァース（キリル・フォックス）とファン・ギッフェンが発掘した現地に立ち、博物館および報告書によって二人の偉大な先覚者が果たした役割を再確認するための旅であった。ソールズベリー博物館のピット・リヴァース特別室の展示が最も印象に残る。浜田耕作を通じて日本考古学にどのような影響があったかという点に多くの示唆を与えてくれたのである。滞欧中、ここに列挙できないくらい多くの研究者・機関から懇切な援助・指導を受けた。深く感謝したい。（山本忠尚）

**博物館活動の地域社会に関する研究** 今回の在外研修では、主に2つのことを目的としていた。1つはスカンジナビアに初めて南から人間が移住したと考えられる地域、メルモ、ゲーテベルグ、ウダハラ周辺の遺跡、遺物を現地で調べる。もう1つは、北欧の博物館と地域社会のかかわりを見聞きすることだった。後者については、北欧の小数民族ラップ人の過去と現在の生活と深くかかわった活動をしている。ヨックモックの「ラップと山の博物館」、ノルボテン県の県立博物館を訪ね、討議、資料交換を行い、さらにスコアラ県立博物館、ボーフス県立博物館で館長以下の学芸員と話し合った。また学校教育と博物館の交流という面では、ファルショッピングあるいはSkövdeなどの、町立博物館の活発な動きに興味をひかれた。（岩本圭輔）

**地中海沿岸諸国における瓦の起源とその伝播に関する研究** という長いテーマで、エジプト・イタリア・ギリシア・トルコを歩きまわった。西方起源の瓦の実態を知るとともに、西周（紀元前11世紀）に始まる東アジアの瓦との比較研究を行うためである。今回、実見し得た最古の例は、希臘アルゴス市近郊のレルナ遺跡の青銅器文化（紀元前3000年）に属す建物の陸屋根にのせた厚さ1cmほどの薄いタイルである。これから、東方起源の瓦が土管を母胎とし、それを分割した曲面をもつ丸・平瓦に発展したのに対し、西方起源のそれは、タイルを母胎としたパン・スタイルの「平瓦」と、その隙間を覆う断面三角形の「丸瓦」を使う「コリント式」として発展した点に大きな違いがありそうだ、という見通しを得た。（大脇 潔）